

には最初から附屬してゐたファインダ1以外に専用のファインダ1として、3糎から5糎、300~500耗焦點の小屈折も良いし、亦5糎から7糎f8位の小口径反射を取付けるのも面白い。倍率も、視相を良く見られる20倍から50倍位が好適である。これにサングラスを被めて直視しても良いが、筆者は投影法によるガイドを推奨する。この方が接眼部に眼を固定させる必要もなく、全ての操作が樂に出来る特點がある。只、直視法に比して、視相の確認が少々困難になる缺點はあるが……。勿論、投映板は適當な方法で固定させなくてはならない。

筆者は、7.5糎、11糎共に、口径36耗、F.L. 500耗の色消屈折鏡に12.5耗接眼鏡を使用し、40倍として、最初はダイアゴナルを使用して直視法に依つたが、現在は投映法を採用してゐる。直視、投映兩法共、ファインダ1の接眼鏡に十字線を張る事は申す迄もない。

6. 主 鏡 の 接 眼 部

主鏡の接眼鏡は、出来るだけ頑丈なものが良い。輕金屬又は合板^{ベニヤ}で作つたカメラでも、相當の重みがかかるのであるから、重みの爲に撓る様では駄目で、接眼鏡の鏡筒への固定座のネジは4點のものが良い。以前の製品では左右2點のものが多く、これでは駄目で、固定座鋸を4點ネジのものに取換へなくては行けない。

微動は必ずラック・ピニオンによる微動装置が必要で、引拔式或は廻轉微動式のものとは太陽寫眞には不向である。ラック・ピニオンのものも、出来れば堅くなく、柔かすぎず、適度な圓滑さを良とし、餘り柔いものは、筒を固定させる固定ネジを供へると良い。餘り堅いものは微妙な焦點調節がやり難い。常にグリスに機械油を混じたものを塗つておくとうい。

以上が、黒點寫眞を開始するに當つて望遠鏡そのものに對する注意で、必ずしも上述の通りでなくても良いが、接眼鏡と接眼鏡の項は出来るだけこの通り御實行御改裝願ひ度い。

次に、太陽寫眞器の製作について詳述する事とする。(つづく)

天 界 正 誤 表

天界第258號(昭和17年第12號)

誤

正

第404頁	5行目、泰曆	2486年4月1日	2486年=4月1日
〃	〃, 回々曆1362年	1月16日	1月8日, 同1363年=12月28日
〃	祝祭記念日, イースタ	3月28日	4月25日
〃	季節, 秋分9月24日	8:	7:
第405頁	月の諸相, 9月滿月	14日22時40分	14日12時40分
〃	外遊星, 木星, 對衝	1月15日	1月11日
〃	〃, 〃, 會合	8月4日	7月30日
〃	〃, 土星, 對衝	12月13日	12月16日
〃	下ヨリ3行目、太陽黒點	異請に	異變に